

第1回全国都市緑化フェア in 京都丹波基本計画検討委員会 議事録

日時：令和6年10月28日 14:00～16:00

場所：亀岡市役所 別館3階会議室

【座長・副座長】

座長 進士 五十八 氏

副座長 井上 敬章 氏

(全国都市緑化フェア in 京都丹波基本計画検討委員会設置要項第4条2項により決定)

〈座長〉

京都丹波フェアは、「緑のふるさとフェア」のようなものだと考えている。あるいは、お祭りというのがずっと日本人の農村の中に営みとしてあり、その現代版だと思えばよいかもしれない。大都市において緑がないので何とか緑にしましょうという運動を緑化フェアとして40年間やってきた。その次のステップとして、地方の素晴らしさをもう一回知らしめる、体験させてその喜びを感じてもらおうと同時に、住民側のシビックプライドを醸成する。そういった取組のトップランナーとなるフェアになればと考えている。

〈副座長〉

森の京都DMOの志自体が、この基本計画と全く同じである。各エリアの素晴らしいコンテンツがなかなか繋がらない、回遊性があまりないということを課題に感じている。資料にあるようにコンテンツの質を高め、文化であったり、歴史であったり、さまざまなストーリーをつなげて回遊してもらえようようなものにできればと考えている。結果、森の京都エリアが活性化し、来訪者にも喜んでもらうことで、全体がハッピーになる。今回、この緑化フェアがフックとなり、そこにドライブがかかることで、開催して終わりではなく、継続的に多くの方に訪れてもらえるようなエリアになればいいなと思っている。

【計画案説明】

『第43回全国都市緑化フェア in 京都丹波基本計画(案)』について事務局から説明

開催期間：令和8年9月18日(金)～11月8日(日)

テーマ：『食農と環境そしてアートで輝く「京都丹波」』

愛称：『京都丹波みどりの里まつり』(261件の応募)

シンボル：19件の応募があり、現在、推進協議会で選考中

キャラクター：亀岡市の『明智かめまる』、南丹市の『さくらちゃん』、京丹波町の『京丹波味夢くん』をアレンジして活用

入場方式・料金については、基本的にフェア拠点への入場は無料とする。ただし、既存の有料施設は、通常どおり入園料を支払っての入場とし、フェア拠点で行う特定のイベントや

プログラムについては、別途、料金を徴収することを検討することとしている。

『基本的な考え方』は、環境に配慮すること、一過性で終わらせないこととし、フェアをきっかけに、京都丹波の活性化につなげていきたいと考えている。

『フェア会場』は、地域全体を会場と捉え、京都丹波のさまざまな魅力が感じられるエリアや場所を、周遊、観光の拠点、スポットにすることを基本的な考え方としている。地域全体で来訪者を迎え、京都丹波を満喫して、心豊かな生活を考えられるような場を提供したり、地域の多様な主体の参加、来訪者を含めた交流を通じて、地域への愛着を持っていただくよう、地域の魅力を向上させ、まちづくりを大きく前進させる機会とする。

『フェア拠点』は、フェアの目的・意義・基本方針をそれぞれの拠点に位置付ける。フェア拠点それぞれのコンセプトに基づき展開する各コンテンツに、京都丹波フェアの開催意義にある、環境、食農、芸術の要素を取り入れ、また、主要なコンテンツは、多様な主体との協働・共創により展開する。

拠点ごとの展開イメージとして、農に触れる拠点、京都・亀岡保津川公園および周辺は、フェアに合わせて、都市公園のベースとなる部分の整備を行い、農の風景に自然素材や農小屋を活用したアートを展開させ、住民と協働して、『農家の庭』を展示する予定。オーガニック農園の体験の他、アユモドキの生息地でもあり、環境について学べる場や、地域のグルメを楽しんだり、農産物を購入できる場にもしていく。

造園・園芸を知る拠点、亀岡運動公園および周辺もフェアに合わせて都市公園を再整備する。運動施設が並ぶ公園の中に、デザイナーによるメインガーデン、企業などの庭園作品、自治体のPR出展、愛好家のハンギングバスケットやコンテナガーデンなど、緑化フェアならではの造園・園芸コンテンツも展開する予定。また、保津川公園と亀岡運動公園では、地域の子どもたちに、会場修景に協力をしていただくとともに、住民の方から募集した作品も展示していきたいと考えている。

歴史・文化を知る拠点、園部公園および周辺も、フェアに合わせて都市公園を再整備する。お城を模した国際交流会館は、大規模な屋内施設であり、文化の拠点として多様な主体との協働による作品の展示や、京都丹波フェアらしいシンポジウムなどを行う予定。また、伝統芸能などの文化体感メニューや、史跡・食を巡るサイクリングツアー、グルメツアー、健幸緑花のまちのPRなどを検討しています。あと、公園内の小麦山には、京都丹波の眺望を楽しめる場を創出する。

植物に触れる拠点、わち山野草の森および周辺は、玄関前に園内で育成した植物も活用する「みどりのトンネル」を整備する。眺望確保のための樹木伐採や植物名サインの拡充などは行うが、基本的には今のまま見ていただく予定。地元産材を活用した小・中学生のプランター作品や、園内の森を使ったアート作品の展示、普段から開催している山野草展も、フェアの冠を付けて実施する。また、地域のグルメを楽しんだり、山野草への理解を深めるためのイベントも開催する計画としている。

グルメ・イベントを楽しむ拠点、府立丹波自然運動公園および周辺は、体育館内の施設整

備など公園施設の充実を計画している。地元産材を活用した小・中学生のプランター作品や、田んぼアートの展示の他、週末を中心に、地域のグルメを楽しめるイベントなどを開催する予定。また、毎年開催している菊花展も、フェアの冠を付けて開催する。

『フェアスポット』は、地域の魅力を表現するエリアや場所、祭事、活動など、地域全体に広がる要素を、ストーリーを設定した上で選定し、巡ることで京都丹波への理解を深めてもらうことを目指し、連動した行催事や地域協働によるプログラムを創出し、魅力的な場の実現を目指す。京都丹波全体または地域ごとの魅力の『なぜ』を空間軸や時間軸で魅せるストーリーを打ち出し、フェアスポットを単なる場所の集まりではなく、意味のあるつながりを持った体験として提示するための枠組みをつくっていくこととしている。

『観客誘致・広報宣伝計画』は、対象とするエリアやターゲットごとに最適な手法で展開し、既存の地域資源やイベントなどを活用したり、フェアに向けた協働の様子を発信することで、開催機運を高めながら誘客効果の最大化を図り、地域外の方への誘致活動を積極的に展開する。エリアターゲット、費用対効果を踏まえ、計画段階におけるリサーチ、検討プロセスの発信、誰もが広報を担える仕組みの構築、情報インフラの整備を行う。行政広報資料の活用、多様な主体との連携による情報発信拠点、シーンの創出、注力エリアを設定し、ターゲットなどに応じた広報活動を展開するイメージをしている。

『協働推進計画』は、一過性で終えず、地域の活性化、発展につなげる、新しいチャレンジや今後の地域活動を支える担い手の育成につなげることを意識して進めていきたいと考えている。既存の取り組みと連携して、多様な主体に計画の実施、運営への参画を促すこと、次世代の育成につなげること、地域課題の解決や地域間の連携につなげること、多様な主体がフェア終了後もまちづくりで活躍できる仕組みづくりと協働企画を挙げており、展開イメージとして協働主体へのアプローチ方法を整理している。『各計画における協働の内容』は、今後、修正することもあるが、計画ごとに開催前から開催後までどのような協働企画を行っていくのかを整理している。基本計画段階では、ワークショップでの計画協議や意見収集などを行い、実施計画段階では、具体的な計画づくりや、各公募への応募、花苗の育成などを行い、フェア直前や開催中は、主に運営面での協働を予定している。そのなかでまちづくりに有効なものは、フェア後も継続・発展させたいと考えている。『各主体における協働の内容』は、協働の主体ごとにフェア開催前から開催後までどのような関わり方をしていたかを表で整理している。子どもから大学生、造園・緑化団体、地域住民、企業、来訪者。京都丹波フェアの意義を踏まえて、農林漁業関係者、飲食・物販・観光関係者、デザイナー・アーティスト・工芸家とも協働していく。今年度はまちづくり活動の実践者と事務局職員も参加したワークショップを3回開催しており、そこで得られたアイデアなどを基に、今後、企画を進めていくこととしている。

『出展展示計画』では、フェア拠点での展示は、各拠点のコンセプトに合わせることで、文化・芸術を取り入れ、京都丹波全域の芸術家が活躍できる場を創出することや主催者展示と協働展示に大別して地域の担い手となる幅広い主体に参加してもらうことを計画してい

る。主体は、各拠点のコンセプトなどを踏まえて設定し、環境に配慮した素材選びに努めることを挙げている。

『出展コンテスト計画』では、全国または京都丹波ならではの主体の参加や、新しい出展手法でフェアの魅力づくりにつなげること、出展者や来場者が環境を考える機会となるよう京都丹波らしさを盛り込むこと、出展者もフェアの作り手になってもらうこと、コンテストも地域活動に焦点を当てた京都丹波フェアらしい評価システムを設定することを挙げている。

『会場運営管理計画』では、安全・安心な会場の保持を行う会場管理と来場者に快適な会場づくりを行う会場サービスに大別し、来場者やボランティアの安全性・快適性確保のための運営体制と施設設置を行うこと、環境に配慮した取り組みを推進すること、多様な主体と協働すること、楽しみながら無理なくボランティア活動に参加できるようにすること、ボランティア活動のフォローとボランティア同士の友好を醸成することを挙げている。表では既存の施設状況や環境運営の状況を踏まえ、会場管理、会場サービス、それぞれの細目ごとの計画方針を整理している。環境に配慮した取り組みとして、エコステーションの設置やマイボトル持参の呼び掛けを含めた給水スポットの設置を検討し、また、インバウンドへの対応もしっかり行っていきたいと考えている。

『交通輸送計画』では、来場方法別に運用を定める来場方法別対策と想定される問題への対策や来場者の安全な案内・誘導を行う交通対策に大別しており、効果的で効率的な交通計画の立案と快適で円滑な交通輸送体制の構築に努めること、過去のフェアでの実績や現状の運営状況などを踏まえた想定の下、周辺環境にも配慮すること、京都丹波の魅力を伝えるための交通手段の利用も検討することとしている。既存の施設状況や管理運営状況を踏まえ、来場者方法別対策、交通対策、それぞれの細目ごとの計画方針を整理しており、恐らく、車での来場が多いと思われるので、多客が想定される日は、臨時駐車場の運用とその駐車場からの徒歩ルートの案内、安全対策は検討していく必要があると考えている。フェア拠点ごとに必要に応じて臨時駐車場、シャトルバスの運用、渋滞対策や交通規制、来場者の誘導なども併せて検討していくこととしている。

『行催事計画』として、フェアの目的・意義・基本方針を踏まえ、京都丹波の多彩な魅力を伝える戦略的な行催事を展開する。フェアの節目に行う公式行事と開催前のPRや開催中の多様な催しの二つに大別し、さらに催事は、主催者が中心となる主催者催事と多様な主体が中心となるタイアップ催事に区分している。タイアップ催事の受け入れ体制を整備し、多くの主体がフェアを盛り上げるような行催事を展開し、また、協働をベースとした自然共生を推進する機会を提供していく。行催事の内容の表では、公式行事は内覧会、開・閉会式、緑化祭とし、主催者催事は、機運醸成のためのプレイベントやカウントダウンイベントとしている。その他、環境・食農・芸術に焦点を当てたテーマ催事、フェアの全体テーマに係るシンポジウムなどのフェア催事、企業テーマ催事、企業団体PR催事、地域共催催事、地域主催催事などのタイアップ催事に分類している。

『飲食・物販計画』では、飲食や物販も京都丹波らしさを表現する一つとして、これまでのフェアより力を入れたと考えており、出店方法や出店期間など、参加参画手法を工夫し、多くの営業参加の獲得と内容の充実を図ることとしている。各フェア拠点のコンセプトを踏まえ、京都丹波ならではの魅力ある飲食・物販サービスを提供すること、効果的なPRで京都丹波の認知拡大を目指すこと、フェア拠点のみならず地域の事業者にも波及効果を拡大させること、来場者や出店者にごみ削減の協力を求めるなど環境に配慮することを挙げている。

『協賛計画』では、企業・団体などに多様な形で協力を募り、各事業に協賛との連携を盛り込み、社会便益を最大化し、支援を獲得する体制を目指す。多様な企業・団体などがフェアで社会貢献をPRできるようにし、積極的に参加できる仕組みをつくることや地域外からの協賛を呼び込む枠組みを設定することを挙げている。展開イメージとして、直接的支援と間接的支援に区分し、それぞれの運用を表に整理している。

『事業推進計画』は、関係団体や各分野の専門家、行政機関などで構成する実行委員会を立ち上げ、各分野の専門家にコーディネーターとして実務を担う事務局と連携しながら、事業の企画立案・総合調整を担っていただければと考えている。また、地域住民やフェアのテーマに関連した活動を行うNPO、地域以外からフェアを応援していただく方々との協働体制を構築する。

『事業スケジュール』は、基本計画または実施計画から開催を準備する段階へと進む。関連する既存イベントをプレ事業として実施したり、モデル的なアクションプログラムを実施し、フェアの開催機運の醸成は早めに進めていきたいと考えている。

『事業費』は、今後目安となる金額が定まったらお伝えすることとしている。

このフェアでは、将来に向けたまちづくりそのものを、緑化フェアという仕組みを使って増進させることを目指し、多くの主体がそれぞれの強みを生かし、弱みを補完し合うことで、既存の取り組みに磨きをかけてフェアの発信力に各コンテンツを乗せたり、地域の活動を掘り起こして光を当てるといったことを実現させたいと考えている。

【委員意見等】

- 第1回目の全国都市緑化フェア開催時と社会状況や自治体の緑に対する意識も変化していると思われるので、京都丹波フェアの取り組みには非常に意義があると考えている。実践に向けて公聴会等で検討されたことがいかに共有されるかということが重要である。情報伝達に関しては「誰に対して」「どういうメディアが」「どういう手法で」伝えるかがポイントだと思っている。
- 京都丹波フェアは京都丹波の美しさ、素晴らしさを緑化フェアの立場から発見する場だと思っており、いかに京都丹波の魅力を発見していくのか、それを未来に受け継いでいくのかというのが、フェアの大きな役割だと思っている。京都丹波の風景・ランドスケープを花を楽しみながら京都丹波の魅力として発見していく。それが未来の京都丹波の

観光資源となっていくということが狙いだと考えている。

例えば、フェアスポットは既存のものをスポットとするだけではなく、それぞれを繋ぐルートがすごくいいとか、そのルートを探すことがすごく大事だという気がするが、基本計画にはそれが記されていない。ルート設定がすごく大事で、ここにそのルート設定を書き込むことで、この緑化フェアの楽しみ方が見えてくる。もちろん徒歩、自転車、車などいろいろな手段があるので、それぞれの手段にあわせたルートをつくるということが、これからの作業になってくると思っている。

駐車場計画に関しては、そういうことを踏まえてどれだけの来訪者がいるのかということ想定しておく必要がある。

花・みどりの視点からいうと、計画にあるような、農村の花というのは売っておらず、その地域で長年栽培されてきたものであるもので、地域の農家の協力を得て育てなければならない。スケジュールにこのような花・みどりの計画を載せなければ、計画にあるようなことを実践するには無理がある

京都丹波フェア独自の大きな魅力としていくためにも、至急にやらなければ本当に間に合わない項目について動いてほしい。

- ウェブサイトは作る人の真剣度により、「どれだけの人に訴求できるか」や「このイベントは何をやっているか」など興味関心を引けるかということに非常に関わってくるので、丁寧に作ってほしい。

SNS についても認知・関心・検索といった行動プロセスに沿って、ホームページやパンフレットへと到達させるための重要なツールなので、そこの流れを捨てずに、一連の流れの中で訴求するということを考えてほしい。

大規模なイベントでは、必ずボランティア教育を行う。地元イベントのボランティアに関わるのが住民のシビックプライドになっている。ボランティアを募り、組織として運営するのであれば、こういったことも踏まえ至急詰めていった方がよい。

ウェブサイトでの情報の出し方についても、点ではなくどのように線でつなげて、かつ、面をどのようにつくるかは重要である。たとえば、歩く距離や速度、どのように滞在するか、その土地の暮らしぶりを伝えることをイメージした案内になっているかなどを意識し、滞在の価値を生み出す必要がある。そのような価値観が、外から見るとすごく重要だということを理解し、ライフステージによって観光の価値観も変化しているということも認識しておいてほしい。

- 亀岡の芸術祭が始まったのが 2017 年で、そこからアーティストがどんどん移住しており、そのアーティストの周辺の人たちがさらに移住してくるという好循環を生んでいる。人口減少は多くの地域の課題ではあるが、そこに住む人々は、自分たちの地域や文化にプライドも持っており、意識していないだけでちょっとした自慢も存在する。亀岡芸術祭でやってきたことは、アートの地産地消であり、自分たちの中にあるものや眠っているものを、自分たちの目だけで見るのではなく、外から見つめたときに、それに

どんな価値があるのかということ掘り起こすという考えで、これまで活動してきた。そういったことを2市1町に広げると美しい企画になると思う。歩いてみないとこれらの価値は分からない。まずは、計画にあるところを全部歩こうと思っており、歩きながら考える。それぞれ、いろいろな世代の人たちに歩いてもらって、それを集約した上で一つプランをつくりあげていきたい。

- フェアに関して市民の理解が不足していると感じている。また、植物調達に関しても間に合うのか不安を覚えている。フェアに向けて道の雑草を除却するなど、市民の協力を求めながら進めていかなければと思う。
- 構想を作成し、基本計画を作成し、次に実施計画を作って実施していくというスキームは、行政の事務処理や交付金の獲得などの面から考えて、一定仕方ないところもあると理解する。だからこそ、検討委員の皆さんには、行政から何かを言うのを待つのではなく、委員から突き上げてアクションしていったほしい。

- 市民が花とか草とかに親しむという機会を、早め早めに設けてほしい。たとえば、寄せ植え教室を毎週開催するとか、地域を回って開催するとか、フェアの前から草花に親しむ機会をつくり、フェアだけが本番とならないように今から動いていただかなければと思う。それとフェア拠点のトイレはどのように考えているか。

<事務局>拠点ごとの来場者数を考え、仮設トイレの設置も検討中だが、基本計画の中では言及していない。想定来場者数は基本計画の資料編にまとめる。

- 拠点なので仮設ではなくて素敵なパウダールームを設置してほしい。近隣の施設や住民がトイレを貸すというやり方で、まちの風景が一つできたという事例もあるので、そのような形で、2市1町の方に借りるという方法も取り組みとしてはあると思う。
- 10月末に京都・亀岡保津川公園の敷地で栽培している学校給食用の米の収穫がある。その風景を見ていただけたと思う。また、この公園をどう飾り付けていくかということがすごく楽しみである。農食ということで、開催までに、生産した野菜を多くの飲食関係の方や企業とコラボレーションできるようなことをやっていきたい。

野菜には旬があり、この時期の野菜というのは、1年後のその時期しか採れないので、それぞれの旬の野菜を用意していただくためには、開催の一年前からコラボして、用意・準備していくということが必要だと思っている。

京都丹波フェアが終わった後の持続・継続・発展という点では、開催後にどのようなことになっているのか、次の季節にはどのような料理が食べられるのだろうということも伝えていくことが発展していくことだと思っている。このような真面目な会議も必要だと思うが、懇親会のような決起集会などを行い、飲食店をやられている委員とコラボして、生産した野菜や野草を食べる機会をつくり、早めにもっと意見が交換できるような場があると、どんどんいい方向に進むのではないかなと思う。

- オンラインネットワークをつくるなど時代に即したやり取りも必要。事前に日程調整してリアルで会議するだけではなかなか進まない。行政の通常業務の縦割りのやり方とは

関係なく、行政内で各部署と連動し、それが結び付いて情報交換・対応もできるような柔軟な仕組みが必要。一方で、市民も同じように動けるようにといった方法論も考え、プロジェクトの自由度を少し高めることも必要。

- 愛称について、この時期に『みどり』という表現を使うかという疑問がある。例えば、『実り』とか。『京都丹波 実りの里まつり』とか秋の収穫の時期に合わせた表現もよいのではないか。開催期間について、9月20日に南丹市最大のイベントの秋のお彼岸花火があり、10月には亀岡祭があり、11月3日には丹波自然運動公園でマラソン大会や丹波食農フェスといった大きなイベントがある時期なので、これらの実施主体にアプローチして一緒に形作っていくことも事務局には検討してもらいたい。
- 開催までの時間的な猶予でいうと、特に花・みどりに関しては、基本計画ができてから次に移ろうということは難しく、その部分だけでも、すぐにでも取り掛かる必要がある。基本計画の図がオーソライズされてしまうと、基本計画が終わってから実施計画という流れになるので、そのあたりのことも明記してもらえるとありがたい。
＜事務局＞実施可能なものから随時着手ということ対応したい。
- 各コンテンツをいかに巡っていくか。その間にどういうルートを、花みどりで発見していくか。なければつくらなければいけないと思う。そのようなことを行い、スポットを回遊してもらえるようになればいい。ぜひ全体で盛り上がるような、分断されずにつながるようなフェアになればよいと思っている。
- お客さん目線が必要だと考えており、仮に1日に2.5万人が来るとなると来訪者属性も様々だと思う。このような人がいるからこのようなルートでといったお客さん目線の整理をしていく作業をたくさん行うとすると、決まっている日だけ集まっていたのでは間に合わず、分科会的なワークショップなどをしないと、時間切れになるのではないかと懸念がある。
- 既存の行政のやり方ではイベントができないし、間に合わない。京都丹波のためになればよいということを目標に、それぞれが本当によいことをしようと動くことが元気な地域づくりへの第一歩だと思う。これを機に、行政と2市1町の市民や町民が一体となって、この京都丹波の盛り上がりにつなげ、それが子どもや孫たちにもよい影響を与えていけるようにするためにも、もっと自由にやれるよう仕組みづくりをしてほしい。事務局にはアクションのスタートをちゃんと出してほしい。

【会議結果・その他】

基本計画については原案のとおり委員了承（愛称に関しても原案どおりとする）

令和7年2月21日に南丹市国際交流会館で全国都市緑化フェア in 京都丹波実行委員会を開催予定